

第21回東川賞審査講評

海外作家賞 金寧万 (KIM Nyung-man)
国内作家賞 小山穂太郎 (Hotaro KOYAMA)
新人作家賞 小檜山賢二 (Kenji KOHIYAMA)
特別賞 鈴木涼子 (Ryoko SUZUKI)

写真が誕生したのは今から166年前のことで、しばらくはその目新しさが写真の最大の魅力だった。しかしいまや写真はもっとも身近な日常の情報手段であるばかりか、近代社会の人類がどのような歴史を歩んできたのかを語る最も有力な語りべであり、同時に未来に向けたメッセージを確実に伝える最も信頼の置けるメディアとして認識されている。その写真を始め映像を取り巻く技術的な環境が急激に変化する今日、写真と人間、写真と文化、そして写真と地域社会の関係を考察する催しとしての東川町国際写真フェスティバル・フォトフェスタのもつ意義は、写真の歴史とその今日的意義にも似て回を重ねるごとに大きいものになりつつあり、ついに今回で21回目になった。そのフォトフェスタの中核をなす東川賞の持つ意義も、ますます大きなものとなっていることは、主催者である東川町が誇りとすべきところであろう。そして本賞の選考、審査を委ねられている審査委員会は、その責任の重さを受け止めつつ、本年度の審査会に臨んだ。

本年度の海外作家賞は、隣国韓国の報道写真家キム・ニョンマン(金寧万)氏に贈呈する。キム氏は1970年代末に、韓国でもっとも有力なメディアのひとつ東亞日報に写真記者として入社し、2001年に現役を退くまでの約四半世紀に渡って激動の韓国社会を常に最前線で写真報道してきた生え抜きのフォトジャーナリストで、その間さまざまな事件や政局の変化を、率直かつ人間味あふれるカメラアイを通して内外の読者に伝えてきた。また個人としてのキム氏の作風は、やさしさとユーモアを交えた親しみやすいまなざしが特徴で、その両面の力量から現代韓国における国民的写真家の代表といっても過言ではない。今回の受賞対象作品は、1999年に上梓された報道写真集『激動20年』であるが、同写真集は我われが韓国の現代社会を理解する上に極めて重要な示唆深い写真集であり、フォトジャーナリズムの普遍的な必要性やその価値を確かめるのにふさわしい内容をもっている。

そして今年度の国内作家賞は、写真を手段とする異色のアーティスト小山穂太郎氏に決定した。小山氏は、写真家というよりはむしろ画家であろう。現在母校の東京芸術大学美術学部絵画科で後進の指導にも当たっているアーティストで、キャンバスに写真薬剤や処理薬品を絵の具代わりに用いて、手と感性と光で描く独特な世界は高い評価と、国際的にも支持者を持つ作家である。写真といえば焼き増しが可能なことによる複数性や、印刷との連携で発揮されるメディアとしての機能に目を奪われがちだが、かつてハンガリー出身のドイツはパウハウスのアーティスト、ラズロ・モホリ＝ナギが提唱したように、写真の機能を用いることで人類は光と影を造形表現の素材とでき、視覚芸術の可能性を拡張できることも、忘れてはならないだろう。その方法論とも相通じる小山氏の制作は、今日は希薄となったあいまいで優しい情感を、さりげない光や色の使い方でキャンバスに展開する。その作品を直に観賞することで、見る者の脳裏が異次元にいざなわれること必至である。絵画的な成立をするオリジナル作品とメディア的側面が突出して発達した今日の写真の関係を問い直すチャンスをもたらす仕事である。

今年度は新人作家賞がこれまた異色である。というのも受賞者は1942年生まれというからすでに60歳を数年超えているが、昨年の夏新宿のギャラリーで初個展を開催し、鮮烈極まりないデビューを果たしたので、写真制作のうえでは新人作家という位置づけになった。その人物は久しくデジタル通信技術の研究開発に携わり、現在は慶應義塾大学大学院で教授を務める小檜山賢二氏で、写真展『昆虫:ミクロ・リアリズム』が選考の対象作となった。同作品は、先端的なデジタル技術で昆虫の観察写真を撮ったもの、などという紹介ではおおよそちがいがあかないダイナミックな作品で、小さな昆虫がさながら太古の恐竜を思わせる様態で迫ってくる。まさに圧巻のネイチャーフォト作品で、個展会場では、大きくデジタル出力されたプリントの片隅に米粒ほどのモデル?となった虫どもが展示してあった。スケール感の意外性が、驚くべき生命の歴史空間を表現している稀有な作品で、そのユニークさから他を寄せ付けず、小檜山氏の受賞が決定した。

北海道にゆかりの作家に贈る特別賞の今年の受賞者は、札幌在住のアーティスト鈴木涼子氏である。鈴木氏は1990年代の中ごろから、活発に作品発表を継続している今日最もアクティヴな若手現代美術家として、諸外国からも注目されている。その人気の原点は、誰にでも身のまわりに覚えがある、ある状況を、ソフトにしかも深く、だが改めて意識すればけっこう鋭くえぐる作品のコンセプトにある。鈴木氏がとりわけ着目するのは、母と娘の関係で、一卵性母娘という言葉で形容される絆を断ち切れない母と娘の関係を、親子のポートレイトの合成という手法で視覚化している。その作品が含んでいる意味の中身には今日の家族制度の問題や、女性と社会の関係を問う基本的なフェミニズム問題など、多様である。近作の『Mama Doll』は一見すると、優しいポートレイト群だが、その背景には多くの設問が托されている能動的で積極的な作品なのである。この写真を用いる闊達なアーティストに本年度の特別賞を贈ることになった。

例年のように、末尾ながらノミネーターの皆さまには記して謝意を表し、講評といたします。

第21回東川賞《海外作家賞》 "The Overseas Photographer Prize"



金 寧万(KIM Nyung-man)
韓国 ソウル市在住



© Kim Nyung-man

「激動20年／A Tumultuous Twenty Years」より

【写真集『激動20年／A Tumultuous Twenty Years』 序文 より】

歴史は記録する人々のものであると言います。

とても大きな出来事さえ記憶から色あせ、公に知られていた状態で記録されたものだけが時の経過を乗り切っています。しかし、記録された歴史が必ず過去に起こったすべてをカバーするわけではなく、そのため、記録の重要性はなかなか重要視されません。フォトジャーナリストは記録します。人生の光景を想像で対処できる他のメディアと異なって、写真は現実に基づいています。これがフォトジャーナリストが「歴史の目撃者」と呼ばれる所以です。私は若いときからフォトジャーナリストになることを夢みてきました。写真の記録は現実に基づいていて、歴史に対処するという事実、私は引き込まれました。私は、カメラで歴史を記録することに憧れました。私は夢を成し遂げ、既に20年になります。まだアクティブであることに感謝し、このささやかな記録が韓国の近代史の一部であるかもしれないという信念でこの写真集の発行を決めました。私が向き合った20世紀最後の20年は激動の時代です。1980年代(それはいわゆる「ソウルの春」で始まった)は、弾圧的な支配者・朴正熙の突然の死で生じた権力の空白への言及で国民が民主化への願望で燃え上がらせられるのを見ました。1980年5月、私は未熟ながらフォトジャーナリストとして光州の市民暴動を担当しました。私は、その時その場でフォトジャーナリストの正義として何を学ばなければならないかを学んだと感じました。危険に身をさらして撮影した写真が戒厳令下の検閲のために新聞に掲載されなかったとき、私は無力さと恥ずかしさを感じました。光州の市民たちは「新聞に掲載されない写真」を撮る私を非難しましたし、私は海外のプレスを通してだけそのような場面が見られたことをまだありありと憶えています。しかしながら、フォトジャーナリストは写真が公表されるか否かに関わらず記録の仕事に忠実であるべきだと言う貴重な教訓を学びました。振り返ってみると、私が仕事に忠実でなかったなら、写真集『光州、その日』を出版することはできなかったでしょう。光州の民主化支持抗議運動は軍隊によって制圧されました。しかし、その厳重な取り締まりでさえ、1980年代に続けられた韓国国民の民主化への切望や暴力的な抗議運動、過度の力の行使を抑圧することはできませんでした。

混乱の間、石と催涙弾が飛び交う抗議する学生と機動隊の中央に立ち、私は1980年代にあちこちから火山の噴火のように爆発した街頭デモに関わっている間、公平であろうと務めました。民主化の達成が一段落すると、1990年代には南北朝鮮問題が表面化してきました。私は幸運にも、北朝鮮と韓国を分断する国境線にある休戦の村「板門店」に関わる機会を持ちました。また、連携して双方ともに応援し合うふたつの朝鮮からの応援団が実現した1990年北京アジア大会のような歴史的瞬間や、2つの首都での一連の会議の後で歴史的な南北基本協定締結につながったソウルと平壤でのハイレベルな南北朝鮮の政治上の会談に関われたことはさらに幸いでした。これらの出来事に関わっているあいだ、写真で南北朝鮮問題を記録することが、私にとって重要であると確信するようになりました。ふたつの朝鮮が再統一されるまで南北朝鮮問題への私の関心は強いままです。ジャーナリストとして私を持続させ続けたのは使命感です。この本に掲載された105枚の写真のほとんどは望ましくない状況下で撮られました。本当に、そこでの状態は決して好ましいものではないと信じています。自分が弱気になることも、私があきらめれば歴史の瞬間は永遠に失われてしまうとよく自分に言い聞かせていました。フォトジャーナリズムのための環境は過去20年間で大きく変化しています。技術開発は特に革命的でした。デジタル技術は2000年に始まる新聞写真を引き継ぐでしょう。今や、すべてが、より速くて、より便利です。しかし、これは、必ずしもフォトジャーナリストの仕事が、より簡単になったことを意味するわけではありません。結局、写真を撮るのは、カメラではなく、人なのです。写真集を出版するときはいつも同じ気持ちと考えが浮かんできます。すなわちこれは終わりではなく、もうひとつのはじまりであると。自作品のこの集積を通じ、フォトジャーナリストとしての私の最初の20年を再検討しようと思いました。私には恩をうけている人や心の奥深くで助力を感謝している人がたくさんいます。私は今、次の20年の新たなスタートを切るにあたり、これらの人々にこの写真集を捧げます。

キム・ニョンマン

第21回東川賞 《国内作家賞》 "The Domestic Photographer Prize"



小山 穂太郎(こやま・ほたろう)
千葉県船橋市在住



© Hotaro Koyama

「ファントム／Phantom」より

第21回東川賞 《新人賞》 "The New Photographer Prize"



小檜山 賢二(こひやま・けんじ)
東京都渋谷区在住



© Kenji Kohiyama

「昆虫:マイクロ・リアリズム／MICRO PRESENCE」より

第21回東川賞《特 別 賞》 "The Special Prize"



鈴木 涼子(すずき・りょうこ)
北海道札幌市在住



© Ryoko Suzuki

「ママドール／Mama Doll」より